推進派の心性を読む

田原　牧

編集局長宛ての抗議メール

4月下旬、編集局長宛てに一通の抗議メールが届いた。差出人の名には「日本原子力研究開発機構（原子力機構）広報部長」のS（実名）と記されていた。

私は現在、東京新聞の「こちら特報部」という特集面を担当している。特別報道部（特報部）に来て12年、そのうち「現場監督」であるデスクを任されて7年ほどになる。

東日本大震災に伴う福島原発事故の発生直後から、特報部では原子力ムラを批判してきた。現在もそのスタンスは変わらない。

総じてメディアでの原発の扱いは減っている。これは世間の関心を反映しており、同時に原発推進派の蘇生とも軌を一にしている。抗議メールを読みながら、事故直後は平身低頭だった推進派も、強気の抗議を出すまでに復活してきたことが印象的だった。

記事への抗議自体は珍しくないのだが、それをわざわざ紹介したいのは、そこに彼らの心性が映し出されているためだ。原発のみならず、この国を覆っている闇を読み解くのになかなか適した教材のように思える。

抗議された記事は、4月24日付朝刊に掲載された福井県敦賀市の高速増殖原型炉「もんじゅ」について扱ったものだ。もんじゅは現在も運転禁止中だが、政府の新エネルギー基本計画で存続が決まった。初臨界から20年になるが、稼働したのは250日。1兆円を超える血税が注がれ、いまも維持のために一日5500万円が投じられている。

事業主体は、文部科学省（旧科学技術庁）傘下の独立行政法人・日本原子力研究開発機構である。いよいよお払い箱かと思いきや、この基本計画によって、放射性廃棄物の「減害・減容」化研究の名目で生き残った。

もんじゅの問題点については、ここではあえて繰り返さない。記事の内容についても「実用化『机上の空論』」「文科省、原子力機構、公益法人……官僚利権の温床」という見出しから、およそ推察していただけると思う。

ただ、抗議の対象は記事の本編ではなかった。このページの片隅には「デスクメモ」という欄がある。担当デスクが所感を書く短い欄で、分量はツイッター1回分である。この日は私が担当で、次のように書いた。

「『もんじゅ』は無用の長物と、福島事故の前から言われていた。だが、事故後も維持すると決めた。書きにくいことを書く。これは福島事故に関連して亡くなった人々を再び殺すことに等しくはないか。事故が反省の礎になれば、無念も浮かばれるかもしれない。しかし、そのかけらもない。法に触れぬ罪だ」

人類のミッションとしての原発推進

さて、これに広報部長のSさんはどう抗議してきたのか。彼の思考と心性を玩味するために、少し長いが引用してみたい。

「今般、エネルギー基本計画が策定され、『もんじゅ』においてもその位置づけ、ミッションが明確に示され、原子力機構としては与えられた課題に対し、経営と現場一丸となって、責任をもって取り組んでまいります。一方で、本基本計画に示された我が国における原子力の位置づけ、さらには『もんじゅ』の位置づけ、なすべきことに関し、それぞれのお立場、お考えで賛成・反対のご意見はあるものと認識しています。

しかしながら、24日の貴コラム『デスクメモ』における表現、『～。これは福島事故に関連して亡くなった（略）』に関しては、原子力の研究開発に携わる者として決して許すことのできない表現であります。貴コラムの言う、福島事故に関連して亡くなった人々とは具体的にどのような方々か、そして何をもってそのような方々を『再び殺す』などということが言えるのか、私どもは事故を教訓に福島以後、更なる安全性を

追求し、我が国のため、人類のため、原子力の平和利用を進めていく自負とともにそこに誇りをもっています。今後の原子力の存在そのものを否定するのは自由、しかし一方、人類のためのミッションとして原子力研究開発・平和利用に携わる者として貴コラムのそのような考え、言葉は存在しないということをここに明確にお伝えしておきます。」

事実から目を背ける自己愛

いかがだろうか。重箱の隅をつつくつもりはない。ここではざっくりと、気がついた2点について取り上げてみたい。

1点目は、福島原発事故では人が死んでいないという彼の認識である。昨年6月、自民党の高市早苗政調会長が同趣旨の発言をしている。このときは、さすがに福島県も抗議を含意したコメントを発表した。すでに原発事故後の3年間で、事故に伴う避難による過労や精神的なショック、それらの末の自殺などで1千人以上が関連死している。

そのことを知らないはずがない。だから知らないのではなく、認められないのだろう。認めてしまえば、「自負」だとか「誇り」という表現は出て来ようがない。

肝心なのは事実を認めないという姿勢である。これは現在の安倍首相やそのオトモダチにも共通している特徴だ。「戦後レジームから脱却」し、戦前を賛美するには、「大東亜戦争」が帝国主義の侵略であり、どれだけの惨禍を招いたかという事実を抹消しなければならない。あったことをないことにする狂気は、それだけで死者を「再び殺して」いるのだが、そこには思いが及ばないのだろう。

2つ目に、文面全体に漂う自己愛、自己承認願望の表出である。「人類のミッション」なる言葉を使える感性は私には理解不能だ。まるで戦隊アニメに、はまっている子どもを見ているようだ。この幼さは不気味である。

失敗しない人間や集団はいない。収束の方途すら見えない事故が起きた。安全神話は崩れた。この時点で反省し、この装置を生み出した社会を変えようとする人びとがいる。

一方で、失敗という結果に帰結した自己の歩みをなんとか肯定したい一心で、失敗をできる限り過小評価し、今後ともそれまでの歩みを継続しようとする人びともいる。Sさんや「私ども」はこの集団に属する。

酷似する原発推進と戦争賛美の心性

一言で言えば、迷惑この上ないのだが、このメンタリティーも現政権と相通じている。戦前の「帝国」に連なる閨閥に属しているということに自らの存在証明がある限り、その閨閥の犯罪性は無視し、賛美するしかない。

「賛成・反対のご意見はあるものと認識」「今後の原子力の存在そのものを否定するのは自由」という表現も、昨今の「保守」を自称する右翼の特徴と酷似している。ひと昔前まで保守を自任する者はいかなる論争にも教師的な立場を装った。いまは異論を排除したい一心で、論争や対話を回避しようとする。

この一通のメールから読み取れるのは、原発問題とは単なるエネルギー問題ではないということだ。奇しくも生活が苦しくなるほど国家依存が高まるのと同様に、福島では事故収束も除染効果も期待できない状況下で「安心神話」の布教が図られている。

原発の推進と戦争の賛美を支える心性は酷似している。そのことが私にとっては、原発問題を追及する意義をそう簡単に減殺できない理由にもなっている。

（たはら・まき／東京新聞特別報道部デスク）

「もんじゅ」存続　エネ基本計画の思惑
看板に偽り
エネルギー増殖→核廃棄物の減害
実用化「机上の空論」
、原子力機構、公益法人…
官僚利権の温床
後の糧 捨てない」

東京新聞 2014年4月24日朝刊「こちら特報部」紙面